

教師を目指す学生に伝えたい実践力⑦

～特別支援学校（知的）における「学習指導案」一考～

辻 誠 一¹⁾²⁾

本学で毎年行われている「特別支援教育実習の事前・事後指導」の演習で、多くの学生が抱く不安や心配事は、決まって特別支援学校の「学習指導案」が上手く書けるかどうかであった。

今回は、教師を目指す学生に伝えたい実践力⑦として、特別支援学校（知的）における「学習指導案」に関する筆者が中心となって作成した「やさしい指導案の書き方」「サポートブックⅡ学習指導案を書こう30のポイント」「やさしい学習指導案の書き方Ⅱ」、筆者の著作である「実践ヒントシート96」「特別支援教育のコツと技」等の内容の一部を紹介する。さらに特別支援学校（知的）における「学習指導案」について、新学習指導要領の「主体的・対話的で深い学び」の視点を踏まえ、「学習指導案」のもつ意義や意味、「学習指導案」作成ポイントを改めて「不易と流行」の視点から整理し、その経験知をまとめ紹介するものである。

キーワード：実践力、特別支援学校（知的）、学習指導案

1. はじめに

昨年度の東北福祉大学特別支援教育室「研究紀要」では、教師を目指す学生に伝えたい実践力⑥として、筆者の多くの実践を振り返り、さらに新学習指導要領の「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業改善の視点を踏まえ、特別支援学校（知的）における授業づくりに欠かせない大切な視点を「研究ノート・提言」としてまとめ紹介した。

今回は、教師を目指す学生に伝えたい実践力⑦特別支援学校（知的）における「学習指導案」一考として、筆者が中心となって作成した「やさしい指導案の書き方」「サポートブックⅡ学習指導案を書こう30のポイント」「やさしい学習指導案の書き方Ⅱ」、筆者の著作である「実践ヒントシート96」「特別支援教育のコツと技」等の内容の一部を紹介する。さらに特別支援学校（知的）における「学習指導案」について、新学習指導要領の「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業づくりの視点を踏まえ、「学習指導案」のもつ意義や意味、「学習指導案」作成ポイントを改めて「不易と流行」の視点から整理し、その経験

1) 東北福祉大学教育学部教育学科

2) 東北福祉大学教育・教職センター特別支援教育研究室

知をまとめ紹介するものである。

教師にとって授業とは、日々、子供たちとの関係性の中で繰り返される一番大切な仕事であり、「学習指導案」とは、その授業の構造を映し出す大切な設計図である。

本学で毎年行われている「特別支援教育実習の事前・事後指導」の演習で、多くの学生が抱く不安や心配事は、特別支援学校の「学習指導案」が上手く書けるかどうかである。ぜひ教師を目指す多くの学生が、「学習指導案」のもつ意義や意味を自覚し、授業の構造を映し出す大切な設計図の基本的な書き方を身に付け、実践力のある教師を目指してほしい。

II. 特別支援学校（知的）における「学習指導案」

筆者が中心となって関わり作成してきた数多くの「学習指導案」に関する著作や原稿の一部を紹介し、特別支援学校（知的）における「学習指導案」のもつ意義や意味、新学習指導要領の求める「学習指導案」に欠かせない大切な視点を紹介する。

1. 筆者が中心となり関わった「学習指導案」について

筆者が初めての養護学校（現在は特別支援学校）に赴任したのは、昭和54年4月、障害児教育の転換期である養護学校義務制の時期であった。

当然、新しく始まる「重度・重複障害児の教育」に関して、学校も先輩教師も全てが手探りの状態であった。新たな体制や指導法、教育の在り方を確立させなければならない時代であり、職員一同、力を合わせ養護学校義務制に対応しようと研究的な多くの実践に取り組んだ。

そのため、筆者も青年教師時代には、次のような多くの実践に取り組み、たくさんの「学習指導案」を作成し、定期的な研究授業や公開研究会の授業に臨んだ。さらにその実践のまとめを各方面の全国の月刊誌等に発表し、発信し続けてきた。

その中から研究授業や公開研究会の授業において取り組んだ実践の一部や「学習指導案」に関連した教師力向上のための著作を紹介する。

1) 青年教師時代の実践及び「学習指導案」に関して

(1) 筆者の青年教師時代の実践

筆者が青年教師時代、数多くの研究授業や公開研究会の授業において取り組んだ実践は下記のとおりであり、各方面の月刊誌に掲載されている。

なお各実践においては、きめ細かな「学習指導案」を作成し、研究授業や公開研究会の授業に臨んできた。

① 「重度・重複障害児を楽しく学習に参加させるための教材教具の工夫」

学研：実践障害児教育 1983 VOL123

- ② 「意欲を高める楽しい朝の会」 学研：実践障害児教育 1984 VOL136
- ③ 「意欲を高める楽しい体育指導—なわを使った運動—」
学研：実践障害児教育 1985 VOL148
- ④ 「数の基礎概念を高める指導（トラック）」 学研：実践障害児教育 1986 VOL152
- ⑤ 「なぞなぞ遊びを通してのことばの指導」 学研：国語指導 12ヶ月1987
- ⑥ 「意欲を高めるサーキット運動（ジャングル探検）」
学研：実践障害児教育 1990 VOL200
- ⑦ 「タイミングコントロール能力を高める楽しく体育指導」
日本文化科学社：発達の遅れと教育 1986 VOL344
- ⑧ 「バランス能力を高める楽しい体育指導」
日本文化科学社：発達の遅れと教育 1989 VOL374
- ⑨ 「運動イメージを高める体育指導—緩衝能動作を中心に—」
日本文化科学社：発達の遅れと教育 1990 VOL386
- ⑩ 「障害の重い生徒でも主体的に取り組める作業学習を求めて—本校高等部基礎作業班の実践から—」
日本文化科学社：発達の遅れと教育 1990 VOL395
- ⑪ 「楽しいパランス遊び—授業を面白くする教材の見つけ方、生かし方—」
明治図書：障害児の授業研究 1989 VOL 17
- ⑫ 「自動車大好き T君の数指導・1～3」
明治図書：障害児の授業研究 1990 VOL 22>23>24
- ⑬ 「小学部（はう・くぐる・とぶ）の実践」 文部省：体育指導の手引き 1987
等々

② 「学習指導案」に関し、多くの研究授業や公開研究会の授業から学んだ視点

青年教師時代、前述の実践や先輩教師から学んだ「学習指導案」に関する大切な視点は、特に次の点である。

① 「学習指導案」のもつ意義と意味

- 「学習指導案」は、家を建てる時の設計図であり、大切な基礎部分である。
 - 教師は授業で勝負する。「学習指導案」は、その授業を円滑に進めるための計画書である。
 - 「学習指導案」は、教師としての力量を写しだす鏡である。
 - 「学習指導案」の作成をとおして、授業を深く考える力が身に付き教師力が高まる。
- ※年に一度は、率先して研究授業を行い「学習指導案」を作成する訓練をする。
- ※漫然と同僚の研究授業に参加することなく、その研究授業から多くを学ぶ。

② 「学習指導案」の書き方ポイント

- 「学習指導案」は、シンプルに、誰が見ても読んでも分かりやすいことが大切である。
- 全ての実践は、子供たちの実態把握から始まり、その実態に応じた指導の工夫が大切である。「学習指導案」には、その指導の工夫や評価等をしっかり明記することが大切である。
- 子供たちの実態、目標、指導の工夫、評価等が、論理的に繋がりをもつことである。
- 特に公開研究会の「学習指導案」は、テーマとの関連を意識し、仮説をもって参観者にその意図が伝わるように項立てや内容を工夫することが大切である。

2) 青年教師時代の全国発信「障害児教育・実践ヒントシート96」(H4.5)

記録を大切に授業実践をまとめた実践研究や事例研究等を発信してきた筆者は、その当時、全日本特殊教育研究連盟の機関誌「発達の遅れと教育」を発刊していた日本文化科学社より、図1 若手教師向けの障害児教育入門書である「実践ヒントシート96」を出版した。

筆者の多くの実践研究の発信から生まれたこの「実践ヒントシート96」は、教師の忙しい仕事の合間を縫っての執筆作業となったが、光明養護学校14年間の実践のまとめにも繋がり、青年教師時代の教育財産となり思い出深い本となった。

その中の「学習指導案」に関する授業案のもつ意義と意味を紹介する。



図1 「実践ヒントシート96」(H4)

(1) 「実践ヒントシート96」 ヒントシート78.79P～(平成4年5月)より

<授業点のもつ二面性とは>

①参観者のための授業案

授業案というものがなければ、授業研究に参加するものにとって、当該授業が何をねらう授業であって、教育課程全体の中にどう位置付けられているか。どのような経過を経て今日の授業に至ったのか。また当面の授業がどのように展開されていくのか。などのことがはっ

きり認識できない。従って、授業案とは以上の情報を盛り込んで、当面の授業の全体構造を参観者に知らせるという役割をもっている。

②教師自身のための授業案

子供たちのために良い授業を展開するという目的を第一にもっているが、広く授業を考えると、構想したりする教師としての基本の力量を養い、教師自身のために行われるものである。

3) 仲間との「やさしい指導案の書き方」(知障専)の本づくり (H6.12)

筆者が、青年教師時代(37歳)に宮城県知的障害教育専門部の命を受けた。編集委員長として、編集委員の仲間5名と二年をかけて、宮城県内の知的障害児教育振興のため、図2のような「やさしい指導案の書き方」(A5版・総215P)を編集・刊行した。

その当時の「指導案」への想いが詰まった編集委員長としての「あとがき」を紹介する。



図2 「やさしい指導案の書き方」(H6)

(1)「やさしい指導案の書き方」あとがき(平成6年12月1日)より

編集委員長 辻 誠一(宮城県立名取養護学校教諭)

良い授業とは、障害がいかに重くとも、子供一人一人が持てる力を十分に発揮して、生き生きと活動し学べる授業である。

そして、良い授業を実践するために、どのような流れで授業を展開したらよいかを示したものが指導案である。強いて言えば、指導案は良い授業を行うための設計図であり、教師としての力量を写しだす鏡なのではないだろうか。

指導案には、こうでなくてはならないという決められた一定の形式があるわけではない。各県・各学校でそれぞれ独自に工夫しているのが現状である。そのため、2年前の第一回「手引き編集」委員会(平成4年10月)は、前途多難の出発だった。指導案の解説以前の問題として、単元・題材、目標・願い、特殊教育・障害児教育などの基本的言葉の共通理解から取り組まなければならなかったからである。指導案そのものについても、宮城県どころか、

すぐ隣の養護学校同士ですら、指導案の形式や書きぶりが、だいぶ違うことに驚かされた。

しかし、話し合いを重ねるうちに、わかりやすく良い指導案には、基本的に共通した書き方のポイントがあることに気付き、話し合った内容を少しずつ一冊の本としてまとめることができた。

この編集委員会での先生方との話し合いは、指導案だけに留まらず、特殊教育全般についてまで幅広く意見交換ができ、私の教員生活の中で、本当に貴重な財産となった。

まだまだ不備な点の多い本冊子であるが、多くの先生方よりご指導を頂き、同じ特殊教育に携わる教師同士、お互いに切磋琢磨し、教師としての力量を高められるよう、少しでも本冊子が役立つことを祈っている。

4) 実践をまとめ全国発信「特別支援教育のコツと技」(H15.9)

筆者が、宮城県教育委員会指導主事時代(50歳)、間近に迫った特殊教育から特別支援教育への移行を見据え、特殊教育時代の不易を整理し、新たな時代へ引き継ぐために、図3のような「特別支援教育のコツと技」初版を出版した。その後二回の改定を経て現在に至っている。その中から「学習指導案」に関する「わかる授業案作成術」の一部を紹介する。



図3 「特別支援教育のコツと技」初版(H15.9)

(1) 「特別支援教育のコツと技」初版(平成15年9月)180P～より

<略案からの出発>

普段の授業で、何の準備もせずに子供の前に立ち、授業をしたり、頭の中だけで授業の流れを構成して指導にあたってはいないだろうか。

授業案とは建物やプラモデルを作る時に絶対必要な設計図である。この設計図(授業案)が曖昧なものであったり、全然無かったりすれば、何回授業を繰り返したとしても、子供たちの貴重な時間を無駄にし、「流された授業」になってしまう。

そこで、まず何の計画もない授業から脱出し、学習の流れを簡単に示したメモ書きから始

めよう。

明日の授業を簡単にデッサンすることから始めれば、それほど負担にもならず、徐々に略案が書けるようになる。

継続は力なりである。授業のデッサン力を高めるためにも、毎日コツコツ略案を書き続ける努力が、授業案（細案）を容易に書けるレベルアップにつながる。

5) 特別支援教育センターでの「サポートブックⅡ学習指導案を書こう」(H22.2)

筆者が、特別支援教育センター所長時代（57歳）、宮城県内の特別支援教育に携わる教師の教師力向上を図るため、指導主事と協力し図4のような「サポートブックⅡ学習指導案を書こう30のポイント」（A4版・総116P）を編集・刊行した。

特別支援教育センター所長としての「学習指導案」への願いを記した前書きである「はじめに」を紹介する。



図4 「サポートブックⅡ学習指導案を書こう30のポイント」(H22)

(1)「サポートブックⅡ学習指導案を書こう30のポイント」はじめに（平成22年2月より）

宮城県特別支援教育センター所長 辻 誠一

「学習指導案」は、教師としての力量を写しだす鏡である。」

遠い昔、諸先輩から何度も指導され、叱咤激励されてきた言葉である。

その当時、先輩も後輩も関係なく、同じ教師（仲間）として、子供たちにとって良い授業とは何か。分かりやすい「学習指導案」はどう書けば良いか。互いに議論し合い切磋琢磨しながら教師としての力量を磨き合ったことを思い出す。

さて、特別支援教育が新たなスタートを切り三年目。

子供たち一人一人の教育的ニーズに応じた特別支援教育の充実が叫ばれ、教職員の専門性のさらなる向上が求められている。

本県の特別支援学校におけるセンター的機能の現状を見ても、各学校の特色を生かした各

種研修会や教育相談を数多く実施し、その充実発展ぶりには目を見張る。

しかし、そのセンター的機能の充実とは裏腹に各学校の授業研究や「学習指導案」、教育課程等を見ていると基本的な子供たちへの指導の方法や「学習指導案」の書き方等で、首をかしげてしまう場面にも多く遭遇してしまう。

子供たち一人一人のニーズに応じた教育を実現するためには、教師全員が、日々の授業を大切に、「授業力」を高めることが大切でる。

そして、その授業の計画書であり設計図である「学習指導案」をしっかりと書く訓練をすることが必要である。しっかりした「学習指導案」を書くことは、指導の方向性を明確にし、物の見方や論理性が身に付き、教師の専門性を向上させる。

そこで、今年度、当センターでは、「学習指導案」の書き方に焦点を当て、学校訪問指導等で気付いた点や内容を整理構成し、「特別支援学校・教師のためのサポートブックⅡ学習指導案を書こう30のポイント」を刊行することにした。

あくまで「学習指導案」とは、画一された一つの決まった形式があるわけではない。各都道府県だけでなく、近隣の学校、同じ学校の他学年や他学部ですら違っているのが現実であり、今回示した学習指導案の書き方30のポイントは、ほんの一例に過ぎない。

まだまだ不備な点の多い本冊子であるが、多くの先生方より忌憚のないご意見ご指導を頂き、県内の各学校で本冊子を参考にさらに検討を加え、各学校の実情に合わせた特色ある「分かる・楽しい学習指導案」を作成し、日々の授業を充実させて欲しいと願っている。

6) 再度、「やさしい学習指導案の書き方Ⅱ」(知障専)の本づくり(H26.3)

筆者が、作成した「やさしい指導案の書き方」刊行から30年余りが過ぎ、新たな視点を盛り込んだ改訂版である「やさしい学習指導案の書き方Ⅱ」(H26)を刊行した。

教師人生の終活として「学習指導案」への想いを記した「まえがき」を紹介する。



図5 「やさしい学習指導案の書き方Ⅱ」(H26)

(1) 「やさしい「学習指導案」の書き方Ⅱ」まえがき（平成26年3月1日）より

宮城県特別支援教育研究会 知的障害教育専門部長 辻 誠一
(宮城県立光明支援学校校長)

この度、学校現場で実践を深めている8名の先生方の協力の下、知的障害教育の手引き第22集「やさしい学習指導案の書き方Ⅱ」を刊行した。

遙か昔（平成6年）、その当時の光明養護学校の山内寛治校長の指導を受け、私が編集委員長となり、5人の仲間と共に精神薄弱教育専門部から二年間をかけて出版した「やさしい指導案の書き方」の改訂版である。

平成6年からは、だいぶ時が流れ、障害児教育を取り巻く時代の流れの中で、本部会の名称も「精神薄弱教育専門部」から「知的障害教育専門部」へと。

そして、慣れ親しんだ「養護学校」が「特別支援学校」、「特殊教育」が「特別支援教育」へと名称だけでなく意味する内容までも、大きく変化してきた。

しかし、時代がどんなに変化しようとも、特別支援教育に携わる我々教師の最大の仕事は、子供たちの実態をより緻密に汲み取り、きめ細かな計画を立て日々の授業を充実させることである。

そして、そのための設計図であり計画書である「学習指導案」をしっかりと書き実践できる力量を備えることが、今も昔も、これからの時代を支える教師にとって身に付けなければならない大切な資質の一つだと考える。

私が、養護学校時代、先輩教師から指導を受けた

「教師は授業で勝負する。」

「学習指導案は、教師としての力量を写しだす鏡である。」

この言葉を今さらながら懐かしく思い返している。

まだまだ不備な点の多い本冊子であるが、多くの先生方より忌憚のないご意見ご指導をいただき、県内の各学校で、本冊子を参考に学校の実情に合わせた見やすく分かりやすい「学習指導案」を作成実践し、日々の授業を充実させて欲しいと願っている。

Ⅲ. 「不易と流行」の視点から「学習指導案」を一考する

筆者の青年教師時代の「学習指導案」に関する実践や教師力の向上を願い作成してきた著作の冒頭挨拶等を紹介してきたが、「不易と流行」の視点から「学習指導案」を一考する。

1. 「不易」の視点の整理

特別支援学校（知的）における「学習指導案」について、「学習指導案」のもつ意義や意味、「学習指導案」作成のポイントを改めて「不易」の視点から整理すると、次の点が重要だと

考えられる。

1) 「学習指導案」のもつ意義と意味

子供の頃、筆者もプラモデルづくりに熱中したものである。慣れてくると設計図も見ずに勝手に組み立てたり、思い込みで組み立ててしまうことがあった。こんな時は決まって大失敗をし、後で後悔したものである。

授業もある意味、プラモデルづくりと同様であり、しっかりと計画された設計図がないと授業のねらいを達成し、分かる・できる・楽しい授業には繋がらないと考える。

特に若手教師は、「学習指導案」のもつ意義や意味を自覚し、書く訓練への努力を惜しまず教師力を向上させてほしい。

(1) 「学習指導案」のもつ意義

「学習指導案」は、その授業の計画書であり設計図である。日頃から「学習指導案」を書く訓練をすることが重要である。そして、しっかりした「学習指導案」を書くことは、指導の方向性を明確にし、物の見方や論理性が身に付き、間違いなく教師の専門性を向上させる。

若手教師には、特に次の3点への意識が大切である。

- ① 「学習指導案」は、教師としての力量を写しだす鏡である。
- ② 「学習指導案」は、家を建てる時の設計図と同様であり、大切な基礎部分である。
- ③ 時代がどんなに変化しようとも、特別支援教育に携わる教師の最大の仕事は、子供たちの実態をより緻密に汲み取り、きめ細かな計画を立て日々の授業を充実させることである。

そして、そのための設計図であり計画書である「学習指導案」をしっかりと書き、実践できる力量を備えることが、今も昔も、これからの時代を支える教師にとって身に付けなければならない大切な資質の一つである。

(2) 「学習指導案」のもつ意味

「学習指導案」のもつ意味には、大きく次の3つが考えられる。

① 参観者のための「学習指導案」

学習のねらいや教材解釈・計画・支援の工夫・学習の流れ等を研究授業や公開研究会の参観者により良く理解してもらう役割がある。そのためには、次の点が重要である。

- 文章はシンプルに、主語述語を整え誰が見ても読んでも理解できる「学習指導案」であること。
- 「学習指導案」全体のレイアウトが工夫され見やすく分かりやすい「学習指導案」であること。
- 特に公開研究会では、研究テーマとの関連が理解できる「学習指導案」であること。

②T・T同士のための「学習指導案」

特別支援学校（知的）では、T・T（複数担任制）での授業がほとんどである。そのため、題材や指導・支援の方法、役割分担を共通理解するための大切な計画書としての役割がある。

- 分担して「学習指導案」を書いたとしても、事前に整合性をチェックし、共通理解が図られた「学習指導案」であること。
- 子供たちの動きや教師の分担、指導・支援の方法が明確に示された「学習指導案」であること。

③教師自身のための「学習指導案」

年に一度でも計画された細案を書くことは、自己満足になりがちな教師という仕事に評価と反省を与え、教師としての力量を高める大きな役割がある。

- 「学習指導案」作成は、日頃から書く訓練への努力が大切である。
- 「学習指導案」作成をとおして、子供たちの実態把握力やアイデア豊に指導・支援等を工夫する力、文章力を養うことができる。
- 子供たちの評価だけでなく教師自身の評価こそが大切である。「指導と評価の一体化」である。

2) 「学習指導案」の書き方ポイント

「学習指導案」は、シンプルに誰が見ても読んでも分かりやすいことが大切である。

全ての授業は、子供たちの実態把握から始まり、子供たちの実態、目標、指導の工夫、評価等が、論理的にしっかりと繋がり、文章化されていることが大切である。

特に公開研究会の「学習指導案」は、テーマとの関連を意識し、仮説をもつて参観者にも、その趣旨が伝わるよう工夫されていることが重要である。

そのための訓練として、略案からの出発と「学習指導案」の書き方ポイントを紹介する。

(1) 略案からの出発

「学習指導案」とは、建物やプラモデルを作る時に絶対必要な設計図と同様である。設計図が曖昧なものであれば、子供たちの貴重な時間を無駄にってしまう。

まず図6のように学習の流れを簡単に示したメモ書きから始めることが大切である。

少しずつ授業を簡単にデッサンすることから始めれば、徐々に「学習指導案」作成に慣れてくる。

継続は力なりである。授業のデッサン力を高めるためにも、メモ書きや構想図、略案を書き続ける努力が、「学習指導案」（細案）を容易に書く力のレベルアップにつながる。

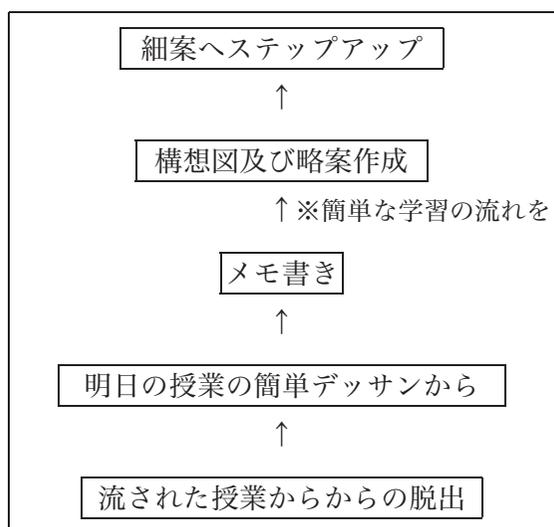


図6 「学習指導案」(細案)までの流れ

(2) 特別支援学校(知的)における「学習指導案」の書き方ポイント

特別支援学校(知的)における「学習指導案」は、通常の教育における「学習指導案」と基本は同じであるが、特に次の点が重視されており十分配慮して書き進める必要がある。

- ①一人一人の子供たちの姿(動き・配慮点・支援の方法)がより見える「学習指導案」
- ②題材(単元)名は、「学習指導案」の顔であり、子供たちがやってみたいと思う楽しい題材(単元)名が工夫されている「学習指導案」
- ③設定理由も児童(生徒)観から始まり、題材観、指導観へと論述された「学習指導案」
- ④T・T方式などの教師の役割分担が明確な「学習指導案」
- ⑤教材・教具の工夫や個々への具体的な指導・支援の工夫や配慮が明記された「学習指導案」
- ⑥実態・学習のねらい・学習内容・工夫点・評価等が、関連付けられている「学習指導案」

3) 「学習指導案」作成から見てくるもの

(1) 一年に一度は研究授業にチャレンジを!

学校現場では、研究授業という言葉聞くだけで尻込みしてしまう教師が多いのも現実である。

本学卒業生には、ぜひ、この研究授業を教師力アップの絶好の機会ととらえ、子供たちの姿が見えるきめ細かな「学習指導案」作成に積極的にチャレンジしてほしい。

この研究授業への積極的なチャレンジから、次のようなメリットが見えてくる。

- ①「学習指導案」作成の絶好の訓練となる。

- ②子供たちの新たな実態の発見に繋がる。
- ③題材（単元）について、多様な視点から深く考える力が身に付き理解が深まる。
- ④作成した「学習指導案」や授業が第三者に客観的に評価され、教師力アップに繋がる。
- ⑤T・T同士の連携を深め共通理解に役立つ。
- ⑦研究授業での教師の学びが、普通の授業にも般化する。（教師にも子供たちにも）

(2) 同僚や先輩の研究授業、他校の公開研究会から多くを学ぶ

学校現場では、チャレンジできる研究授業は、せいぜい年一回程度である。

そのためにも同僚や先輩の研究授業、他校の公開研究会に漫然と参加することなく、貴重な機会を活用し、授業の展開の仕方や「学習指導案」作成について学ぶ姿勢が大切である。

＜研究授業や公開研究会へ参加する視点＞

- ①必ず参観した授業の良さを見つける努力をする。
- ②「自分だったら」という研究授業に対する課題意識をもつ。
- ③「学習指導案」の形式や内容について、自分の考え（感想や質問等）を整理する。
- ④自分の考え（感想や質問等）を整理し、授業反省会に臨み、必ず発言する。
- ⑤「参観アンケート」がある場合は、御礼や感想、質問等を丁寧に記入する。

自分の意見や感想を誠意をもって記入することが、授業者に対する礼儀である。

2. 「流行」を採り入れる

令和2年4月より「特別支援学校小学部・中学部学習指導要領」（平成29年4月28日告示）が移行措置を経過し、小学部・中学部では全面実施となった。

新しい学習指導要領の求める授業づくりでは、学習指導要領改訂の方向性のとおり、大きく次の3つの視点が求められており、当然、「学習指導案」においても、この3点を意識し設定理由や各種の目標、学習過程、評価に連動させて明記することが大切である。

①「何ができるようになるか」の視点

「新しい時代に必要となる資質・能力と学習評価の充実」を図るため、学びに向かう力・人間性等の涵養、生きて働く知識・技能の習得、思考力・判断力・表現力等の育成

②「何を学ぶか」の視点

新しい時代に必要となる資質・能力を踏まえた教科・科目等の新設や目標・内容の見直し

③「どのように学ぶか」の視点

主体的・対話的で深い学び（「アクティブ・ラーニング」）の視点からの学習過程の改善

3. 「特別支援教育実習の事前・事後指導」の演習での取組

筆者が担当している「特別支援教育実習の事前・事後指導」の演習では、毎年、「学習指導案」のもつ意義と意味を意識させ、講義の中で授業の骨子となる構想図作成の指導を採り入れている。

図7の事例は、本学「特別支援学校・教育実習の手引き（第5版）」の課題である生活単元学習「七夕会をしよう」の構想図（学生作成）である。受講の学生は、各自、取り組みたい授業のメモ書きを基盤として、対象児の実態、単元名の工夫、指導・支援の工夫、学習計画や本時の工夫をA一枚に整理し、イメージした構想図を作成する。

次に、その構想図を基にきめ細かな「学習指導案」作成にチャレンジしている。多くの学生は、特別支援学校（知的）の「学習指導案」作成は初めてであるが、イメージした構想図作成までは時間がかかるものの、その後のきめ細かな「学習指導案」作成への移行はスムーズである。

図7の学生による構想図は、同じ生活単元学習「七夕会をしよう」を基に作成された構想図であるが、学生一人一人の授業に対する思いや工夫点がしっかりと構造化され、その後の「学習指導案」作成に効果的であった。

筆者が校長として勤務した宮城県立角田養護学校（当時）や宮城県立光明支援学校でも、「学習指導案」作成時には、この構想図を活用し効果を上げてきた。

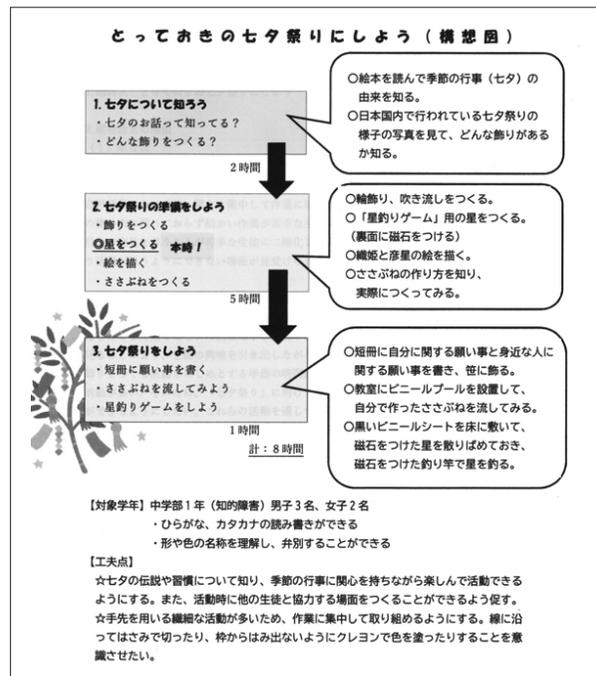


図7 学生A「とっておきの七夕祭りにしよう」

IV. まとめ

特別支援学校（知的）における「学習指導案」は、小学校・中学校の通常の学級の「学習指導案」に比較し、特に子供たち一人一人の実態や姿、個々への配慮・工夫等が、見やすく・分かりやすく・論理的に構成されていることが重要である。

本稿のまとめとして、次の「不易と流行」の視点を再確認し、「学習指導案」を作成することが大切である。

<「不易」の視点から>

- ① 「学習指導案」は、教師としての力量を写しだす鏡であり、授業の計画書であり設計図である。
- ② 「学習指導案」を書くことにより、子供たちの実態把握や、物の見方、論理性が身に付き、教師の専門性を向上させる。
- ③ 特別支援教育に携わる教師の最大の仕事は、子供たちの実態をより緻密に汲み取り、きめ細かな計画を立て、日々の授業を充実させることである。そして、その基盤となる「学習指導案」を書き実践できる力量を備えることが、今も昔も教師の大切な資質の一つとなる。
- ④ 「学習指導案」は、参観者、T・T同士、教師自身のために作成するものである。そのため、文章はシンプルに誰が見ても読んでも、見やすく理解しやすいことが大切である。

<「流行」の視点から>

新しい学習指導要領の求める授業づくりの3つの視点を「学習指導案」の設定理由や各種の目標、学習過程、評価に連動させて明記することが大切である。

- ① 「何ができるようになるか」の視点
- ② 「何を学ぶか」の視点
- ③ 「どのように学ぶか」の視点

さらに、主体的・対話的で深い学び（「アクティブ・ラーニング」）の視点から、学習過程を工夫することが望まれる。

<「学習指導案」作成に関して>

- ① 「学習指導案」作成の前に、授業全体をイメージし、しっかり構想を練ることが大切である。
- ② 同僚や先輩の研究授業、他校の公開研究会から多くを学び、「学習指導案」を見る目を養う。
- ③ 構想を練るためには、筆者の本学での実践（構想図作成）が効果的である。

V. おわりに

今回は、教師を目指す学生に伝えたい実践力⑦として、特別支援学校（知的）における「学習指導案」に関する筆者の著作等から拙い経験知の一部を紹介した。

さらに特別支援学校（知的）における「学習指導案」について、新学習指導要領の「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業づくりの視点を踏まえ、「学習指導案」のもつ意義や意味、「学習指導案」作成のポイント等を改めて整理し、「不易と流行」の視点から「研究ノート」としてまとめた。

やはり子供の姿が見える「学習指導案」は、教師としての力量を写しだす鏡であり、教師力を向上させる今も昔も大切なツールの一つである。

ぜひ教師を目指す学生には、「学習指導案」のもつ3つの意味（①参観者・②T・T同士・③教師自身）や意義を自覚し、シンプルで子供たちの姿が見える「学習指導案」を作成できる実践力のある教師となることを期待している。

なお「学習指導案」の形式については、これが一番という決まった形式は存在せず、各学校の実情や実践により異なり、論理性を考慮し、工夫された「学習指導案」が多く見られるため今回は提示しなかった。

ぜひ今後、本稿のまとめを参考に各校の実情や実践に応じ、さらに工夫・検討願いたい。

最後に筆者と共に特別支援学校（知的）の「学習指導案」の在り方を模索し、実践してきた多くの先生方に感謝申し上げます。

参考・引用文献

辻 誠一（2021）教師を目指す学生のための教育実践—45年間の教員生活の学びを振り返って—。東北福祉大学研究紀要，45，227-244

文部科学省HP「新学習指導要領の方向性」，2017.4

辻 誠一（2004）障害のある子との学級づくり・授業づくり，日本文化科学社「発達の遅れと教育」

特別支援学校・教師のためのサポートブックⅡ「学習指導案」を書こう30のポイント，宮城県特別支援教育センター，2011.2

辻 誠一（2008）改訂・特別支援教育のコツと技，日本文化科学社，2015,4フィリア出版より再版，

辻 誠一（2017）実践・特別支援教育テキストブック，教育開発研究所

辻 誠一（1992）障害児教育・実践ヒント・シート96，日本文化科学社

やさしい指導案の書き方，宮城県特殊教育研究会精神薄弱教育専門部，1994.12

やさしい学習指導案の書き方Ⅱ，宮城県特別支援教育研究会知的障害専門部，2014.3